

言葉は人を自由にする

藤川哲史

三月下旬から四月上旬にかけて、パリに行ってきた。出発前の東京も不順な天候であったが、着いてからも小雨の降る寒い日が続き、徐々に体調が悪くなっていくのがわかった。

今回のパリ行きの目的は、娘が一年半ほど借りていたアパートの解約手続きと荷物の整理を行うためであり、東京に戻っていた娘も同行した。

娘のためにパリにアパートを借りることになったそもその理由は、油絵画家である彼女の心の病である。日本の学校や社会にうまく適応できなかった娘は、子供の頃に住んでいたフランスに自分の居場所を見つけようとした。医者から「街中を裸で歩いているようだ」と形容されるほど、か細い神経を持つ二十歳過ぎの女性にとつて、人をあまり特定の型にはめようとせず、良い意味で放っておいてくれるフランスの社会は、とても居心地の良いものであったようだ。

娘のアパートに着いて、早速荷物の整理にとりかかろうとした私は、娘のマイペースぶりにすぐにも戸惑うことになった。東京での個展を控えた娘は、デッサン帳やパソコンを持参してきており、絵を描いたり、東京のスタッフとの打合せに時間を費やすばかりで、部屋の片づけを始める様子がない。私とは言えば、毎日少しずつでも負担を軽くしていくという仕事のやり方をしてきたせいか、あるいは性格のためなのか、昨日と今日の状況が全く変わらないということにはとても耐えられそうにない。おまけに、狭いアパートにはベッドは一つしかなく、多少時間帯がずれてはいるものの、娘と一緒に寝ることに神経を使わざるをえない。時差のためか妙な時間に目が覚めて、一人で椅子に腰かけて片付かない部屋を眺めていると、自分は何のために来たのかと暗澹たる気持ちになった。

気を取り直してパンを買いに外出してみた。アパートは17区と18区の境目にあり、高級住宅街と言うにはほど遠い環境にある。比較的移民が多く住んでいるせいか、身体の大きな有色人種とよくすれ違う。それだけでも結構神経を使うのに、パン屋でもフランス語がよく聞き取れず、とつさに言葉も出ず、フラストレーションが高まる一方だ。路線図を片手に地下鉄に乗れば、観光客目当ての掏摸や強盗が近寄ってくるのではないかとピリピリして疲れてしまう。考えてみれば、過去に仕事で来た時には、たいいていのことは現地のス

タッフがやってくれ、移動も車を使い、こちらはただ敷かれたレールの上を歩いていけばよかったのだから、楽なものであった。窮屈だ窮屈だと文句を言っていたが、組織に属するということはこういうことだったのかと、退職三か月で改めて身につまされることも多い。

身体全体が熱っぽく、絶えず緊張しているような状態が続いたある朝、ベッドから起き上がろうとすると、天井がグルグルと回り始めた。二〇秒ほどして治まったが、眩暈の不快感は日中もずっと引きずることになった。歩いていても食事をしていても、目と目の間の奥の方が何かフワフワと波打っているような感覚が消えることはなかった。十年ほど前に同じような症状が出た時、「血圧が上がってオーバーヒートしている」と医者から言われ、軽い安定剤を処方してもらうと、あつという間に症状が治まったことがあった。今回も同じかと思い、たまたま持っていたデパスを飲んでみたが、少しも改善される気配がない。これはひよつとして脳の内部に異常があるのではないかと想像すればするほど、不安が増幅することになった。とは言え、ホテルで休んでいるだけではもったいないので、近くの美術館に行くなりお土産でも買いに行こうかと思いついて外出してはみたものの、顔が次第に熱を帯びて、脂汗までにじみ出てきた。あきらめてホテルに戻り、外国で医者にかかることに躊躇しながらも、その不安を体調不良の不安が上回ったため、フロントに病院を紹介してくれるよう相談すると、目と鼻の先に適当なクリニックがあると言う。

腹を決めてクリニックの扉を押すと、待合室のようなところに十人ほどの人が座っている。皆にジロジロ見られているような気がしながら、どこへ行けばよいのかとウロウロしている、フロアーにいる職員らしき女性から受付カウンターに行くようにと英語で指示をされた。受付カウンターでは、調べてきたフランス語の表現を使って、必死に症状を説明した。何とか通じたようだが、今度はそれに対する相手の返事がよく聞き取れない。返事に詰まっていると、すぐに英語に切り替えてくる。最近の傾向なのか、パリだからなのか、あるいは病院だからなのか、こんなに皆が英語を使うのだろうか、妙なことに感じた。評判の良いクリニックなのか待合室の席はほとんど埋まっていたが、驚いたことにすぐに名前を呼ばれて診察室に招き入れられた。いっせいに皆の視線を浴びたが、気のせいしか好意的な空気を感ずる。

待っていた医者は見るからにエネルギー豊富な初老の男性で、やたら早口なうえに言葉に合わせて手や体を細かく動かす表現力の豊かな人であった。最初に、フランス語で話しか英語で話すかを聞いてくる。「どちらもあり得意ではないが、やはり英語で」と答える

と、早速英語に切り替えて「状態を説明しろ」と言う。英語で説明をしながらも、「眩暈」という英単語を思い出すことができず、「ここに来る前に辞書で調べてきたフランス語の「ヴェルティージュ (vertige)」という言葉を使ったが、何とか通じたようでほっとする。フンフンとうなずきながら聞いていたが、こちらの話が終わると、待ち構えていたように、「その眩暈というのは、自分の周囲が回る感じなのか、自分の身体そのものが回る感じなのか」と質問をしてきた。「自分の周囲が回る感じだ」と説明すると、「最初に疑わなければならぬのは耳の異常だろう」と言って、器具を使って耳の中を見たが、特段の異常はないようだった。眩暈の原因について詳しく説明してくれたが、聞いたことのない単語も多く、発音にもいわゆるなまりがあるのか、うまく聞き取ることができない。それでも、その熱心さと誠実さが伝わってくることは間違いなく、また知的な面でも頼りになりそうであったことから、「是非とも血圧を測って調べてくれ」と強く懇願した。測ってみると、上が120ということで、全く正常であった。脳のMRIを撮るかと言われたが、帰国の日が迫っていたこともあり、丁寧に断りして、当座の薬を処方してもらうことにした。

薬局では、最初から英語で話しかけられ、薬の説明を受けたが、ふと処方箋を見ると、右上に担当した医者の名前が書いてある。とても難しくて発音できない名前だが、どう考えても純粹のフランス人（ラテン系）の名前ではなく、東欧系の名前のように読める。名前の下には、パリ大学の医学部で学位を取ったこと、モントリオール的高等医療機関に勤務したこと、現在はパリの医師会のメンバーであることなどが書かれている。これがフランス医学界の一般的な流儀なのかどうかはわからないが、彼の顔を思い出しながら、移民の子が猛勉強して、実力で評価される可能性の高い医学の世界に入り、そこで確固たる自分の居場所を勝ち取った、という人生を想像した。

外国で病気になることは辛いものである。街で食事や買い物をするだけでも決して容易なことではないのに、病院へ行って体調の悪い中、気力を振り絞って病状の説明をすることは、相当な語学力と知力を必要とする。おまけに、病気は誰もがかかるものである。外国人が海外において、何らかの組織に属することもなく、もちろん観光客としてではなく、個人として生活するということは、こういうことと日々付き合っていくことを意味する。さらに、外国人が異国の地で、単に生活をするというレベルを超えて、一個の自立した人間として生きていこうとすればするほど、途方もなく辛辣な経験を乗り越えなければならぬだろう。

私の娘にどの程度の語学力が身に付いており、パリでどのように生きてきたかについて、

私は必ずしも明確に理解しているわけではない。しかし、アパートを引き上げる際の大家や不動産屋とのやりとりはとも見事なものであったし、近所のパン屋やチャイニーズのテイクアウトの店へ行っても、皆から親しまれ、愛されていることがわかった。美術学校の教師たちとの全く妥協のない真剣なやり取りを聴くこともできた。これらは、語学力の問題でもあるが、それ以上に娘の吐き出す言葉の力の成果ではないかと思う。

言葉とはただ意味が通じればいいというものではない。それは、自分を表現するための重要な武器となるものである。自分を表現することによって、他人に自分を理解させ、共感させることができるものである。同時に、他人を理解し、受け止めるためのものでもある。この相互作用にこそ言葉の本質があるのではないかと思う。

レストランや郵便局でフランス語が上手いと喜ばれ、高熱を出したり足のケガをしたときに、地域の人々からの強いサポートを受けられたことは、娘にとって望外の幸せであった。しかしそれにとどまることなく、芸術の世界の中で、フランス人との友情や愛情を通じて、言葉の力が娘に自分らしく生きるための新しい世界の扉を開いてくれた意味は限りなく大きい。言葉は人を自由にするのである。

(了)